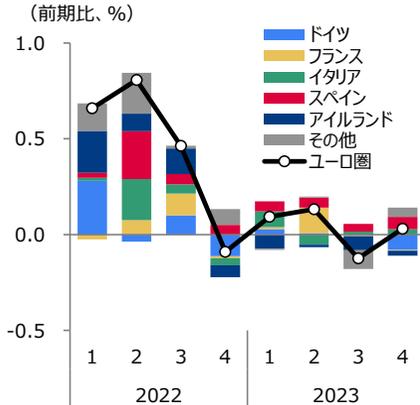


欧州

ユーロ圏GDP（2023年10-12月期）

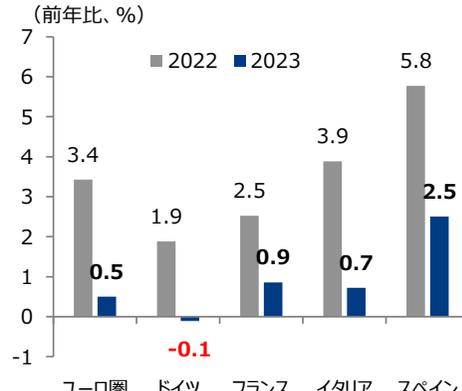
景気後退を辛うじて回避したが、経済の停滞は続く

1 実質GDP成長率（ユーロ圏）



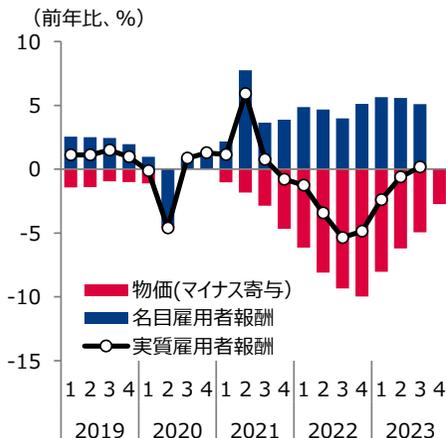
注：国別は寄与度。  
出所：Eurostatより三菱総合研究所作成

2 実質GDP暦年（主要国）



注：ドイツの23年成長率は、ドイツ統計局が公表する季節調整前の指数では▲0.3%。  
出所：Eurostatより三菱総合研究所作成

3 実質賃金（ユーロ圏）



注：四半期。物価は、HICP総合の四半期平均。  
出所：Eurostatより三菱総合研究所作成

4 主要航路の貿易量



注：日次。直近は24年1月28日。  
出所：IMF Portwatch より三菱総合研究所作成

評価ポイント

今回の結果

- 23年10-12月期のユーロ圏の実質GDP成長率（速報値）は季調済前期比0.0%（図表1）。2四半期連続のマイナス成長が予想されるなか、辛うじて景気後退（テクニカルリセッション）を回避した。
- 主要国では、ドイツが同▲0.3%のマイナス成長となった。一方、スペイン（同+0.6%）、イタリア（同+0.2%）などの南欧はプラス成長となり、マイナス成長回避に寄与した。
- 暦年では、23年のユーロ圏の成長率は前年比+0.5%とコロナ危機直後の20年を除けば、13年（同▲0.2%）以来の1%を下回る低成長となった（図表2）。物価の伸びは鈍化しているが、物価高と金融引き締めが内需を抑制した。
- 主要国では、ドイツのみ暦年でもマイナス成長（前年比▲0.1%）となった。他国と比較し、製造業のウエイトが高いこと、エネルギーをロシアに依存していたこと、中国向け輸出割合が高かったことが、低成長の背景にある。

基調判断と今後の流れ

- ユーロ圏経済は景気後退を回避したが、停滞が続いている。
- 先行きも低成長が続くとみる。既往の金融引き締めの効果が实体经济に波及しており、引き続き内需を抑制するだろう。ただし、実質賃金がプラスに転じたことから、消費は緩やかに持ち直すとする。ユーロ圏の実質賃金は23年7-9月期にプラス（前年比+0.2%）に転じており、23年10-12月期はプラス幅が拡大したと予想される（図表3）。過去の賃金と消費の関係をみると、実質賃金がプラスの時期は消費も増加している。
- 先行きのリスクは、紅海問題による物価上昇・供給制約の再燃だ。紅海問題を受け、スエズ運河を回避し喜望峰経由での海上輸送が増加している（図表4）。海運コストの上昇はコロナ危機後と比較し限定的だが、自動車生産への影響などが生じている。紅海問題の長期化や中東情勢がさらに緊迫化した場合、ユーロ圏経済を下押しするだろう。